

「共創」って？

内田 満夫

立ち位置が明確で足腰も強靱な両者の連携が実現していたら、強力な対立軸として、その後の国内政治に存在感を示していたに違いない。その後与党の一員となった公明党も、不本意なくつかの「加担」をさせられることもなかったのではないだろうか？

神戸の地元紙全面広告紙面に過日、気になる大きな活字を見つけた。それは「共創」。

半世紀前、そっくり同じ文字が世間で話題になったことがある。一九七四年十二月に持ち上がった、「共創（又は創共）協定」のことである。半世紀前に、政治団体である日本共産党と日蓮宗の信者団体である創価学会との間で、協力関係模索の動きがあった。

当時、共産党と学会が支援する公明党は、自社二大政党主導の政治状況下で議席を争っていた。平和、文化、教育への指向、生活者支援などの政策の共通性から、支持基盤が重なり選挙戦では競合することが多かったのである。また言論出版妨害事件などで両者が激しく対立することもあっただけに、その動きは世間から驚きをもって受け取られていた。

共産党の宮本委員長（当時）と学会の池田会長（当時）との会談は、松本清張が取り持って実現したと言われている。片や社会主義を標榜する政治家、片や仏教界の信仰に生きる宗教家。人の幸せをめざして別の切り口から同じ景色を見ているはずの両者は、敵対関係にはなく協力が可能だとの認識が半世紀前にあり、実験が始まろうとしていたのである。ところがなぜかその後、動きは頓挫する。

さて冒頭の地元紙全面広告だが、大阪関西万博開幕に向けてのキャンペーンだった。「未来の実験場を共創へ」のタイトルが大きく踊っている。読んでみると、「科学技術と融合しながら発展する人間と社会の新たな在り方を、協賛企業と共に創造し世界に発信していきたい」とある。

実はこの「共創」なる語句、最近やたらと目についていたのだ。「共創」を掲げる学校が存在することも分かった。たとえば九州大学共創学部のほか、国際共創学部、社会共創学部、共創デザイン学科など、「共創」を掲げる学部、学科がいくつかできている。

まだ辞書にもない新語だが、その主旨説明を読むに、人と社会をさらに限らない発展と利便性の世界に駆り立てる狙いを直感する。半世紀前に幻（まぼろし）と消えた「共創」とは似て非なるコンセプトで、言葉だけが蘇ったかたちだ。所詮、「足るを知る」ことが置いてきぼりの、あいもかわらぬ競争経済世界の掟の話らしい。

人は何のために生きていくのか？ 幸せを求めて、というのならわかる。少なくとも、競争し発展するために生きていくのではないはずなのだが……。